

作品名 《3×1+》

この作品は一見、宇宙や天体の動きを再現したかのようですが、実際には何かを表している訳ではありません。人にとって最大の体験は何か。それが作品の目指すものです。そしてその可能性を探ることは人間の知覚の限界を探ることに繋がっています。

私は山岳や洞窟、建築などの空間に関するフィールドワークを行い、空間と時間、そして光と闇が体性感覚に与える影響を探っています。ここではその体験を基に、要素を極限まで削ぎ落とし、空間を構成しています。それが宇宙のイメージに似ることは、宇宙をみるマクロ的視点は具体的な事象を削ぎ落とした眼によるものだということを示しています。

また作り手は制作の中で、時に殆ど全ての労力を手仕事の痕跡を消すことに費やします(※1)。イメージのみを伝えるために、もともとそこにあったかのようにみせるために。つまりそこには、手の跡が消えているものほど手がかかっている、という矛盾があります。近づいて良く目を凝らせば、そこに手の痕跡が見つかるかもしれません。それは遠い星を眺め、そこに生命の存在を想像する視点と、どこか似てはいないでしょうか。

また、何も表していない点においても、この作品は宇宙と似ているでしょう。ここで言う宇宙とは、大気圏の上の空間のことではなく、自ら然る存在-自然のことを指します。自然は何も表さないがゆえに、何も求めないがゆえに、人の介入を無限に許容します。私は人でありながら自然に近いものを作りたいと考えています。人が擬似的に自然を作ることには意味があるのでしょうか。人がその内部にある、自然の一部(※2)としての力を発揮しているとき、人はその人の内部に宇宙に触れたときのような感動をみるのだと思います。

※1、極小の作業の集積によって、全体が構成されていることも宇宙の構造に通じるものがあるのかも知れません。

※2、人体を構成する部品は星の内部で生まれたものです。

プロフィール

武蔵野美術大学建築学科専攻。高所登山やケービングなどのフィールドワークを行い、「空間の知覚」と「体性感覚の変容」をテーマに空間を実体化するインスタレーション作品を制作。2015年 Arte Laguna Prize Finalist(ヴェネツィア)/Aichi arts challenge 入賞、2014年 Smart illumination 横浜 観客賞/食とアートの回廊(信濃大町)/Teleceptor(東京)、2013 千田泰広インスタレーション展 KNAM(軽井沢)、2010 文化体験プログラム展(豊科近代美術館)、2009 神戸ビエンナーレ国際コンペティション入賞。他、受賞、個展、舞台美術等。10/31-11/16「宇宙芸術祭」種子島に参加。現在長野県の山林5haの敷地に、アートパークを建設中。 <http://www.chidayasuhiro.com/>